

## 人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校種間の接続・一貫性を追及した実践事例
-------	----------------------

### 1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

大阪府高槻市

○学校名

高槻市立若松小学校

○学校のURL

<http://www.takatsuki-osk.ed.jp/wakamatsu/>

### 2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】1、4、5、6年：1学級 2、3年：2学級

【特別支援学級】2学級 【合計】10学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】190人（平成26年9月1日現在）

（内訳：1年生25人、2年生43人、3年生39人、4年生31人、  
5年生23人、6年生29人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

文部科学省 平成25～26年度人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

\* 「つながる若松@ヒューマン」

わくわくする子、かんがえる子、まえむきな子、つながる子の育成

\* 中学校校区の目指す子供像

「仲間とつながる 地域とつながる 夢・生き方につなぐ」

【人権教育に関する目標】

\* 「出会い・気づき・つながり」を通して、人の思いを受け止められる子供の育成を目指す。

○人権教育に係る取組一口メモ

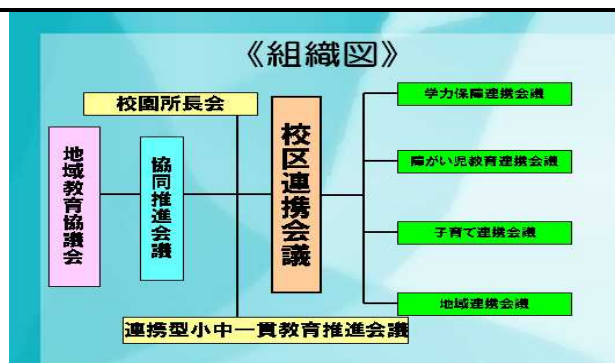
子供たちの実態と課題を中学校区全体で共有し、共通の目指す子供像の実現化に向け、人権教育の指導方法等の在り方について「第三次とりまとめ」を踏まえた「0歳から15歳までの人権教育カリキュラム」を作成した。

○人権教育にかかる取組の全体概要

本校を含む城南中学校区（城南中学校、若松小学校、西大冠小学校、春日保育所、西大冠幼稚園の5校園所で構成され、校区では「にじわ学園」として取組を行っている）では保育所、幼稚園も含めた小中連携を基盤に、生きる力の育成をめざし、

取組を進めている。子供の実態から課題を整理し、共通の目指す子供像を策定するとともにその具体化に向け、「子供の見方」「つきたい力」を共有している。教科授業だけでなく、人権教育においても「個人—集団—個人」という学習スタイルを基本として、仲間とつながる授業を実施するとともに人権教育カリキュラムについても、0歳から15歳までを見通した子供の育成を視野に入れ、系統的な人権教育カリキュラムを作成している。

取組にあたっては、各組織の連携担当が集まる「校区連携会議」を中心に進めている。個別の重点課題についても各担当で実態交流、課題の共有化を図り、地域、保護者とも連携を図りながら中学校区全体で子供を育てている。



### 3. 特色ある実践事例の内容

平成8年に虹のグラデーションのように小中の段差を低くするという意味で「壁とりはらって夢～虹からの出発～」というフレーズを合言葉に小中連携を進めてきた。また、小中連携を進める上で、小学校と中学校の連携だけでなく小学校どうしの連携も行い、両小学校と中学校の教員が相互に学校を行き来する等、人権教育と学力保障を柱に城南中学校、若松小学校、西大冠小学校、春日保育所、西大冠幼稚園、そして地域とが協働する取組を進めてきた。

平成24年度に高槻市の連携型小中一貫教育の研究指定を受け、城南中学校区の目指す子供像を策定した。策定にあたり、保・幼・小・中の教職員が集まる校区研修（校区人研）で、今の校区の子供たちの実態から、どんな子供に育ててほしいかをグループに分かれて話し合った。



- ・自分に自信を持ち、苦手なことも仲間とともにチャレンジする子
- ・互いの違いを認め、それを理解する子
- ・様々な人と出会い、関わり、ともに行動する子
- ・出会った人との違いを受け止め、その生き方に触れ、自分はどうか生きようか考えをもてる子
- ・夢を実現するために何が必要か考え、仲間とともに社会へ働きかける子

以上のような意見が各グループで話され、中学校区の目指す子供像を「仲間とつながる 地域とつながる 夢・生き方につなぐ」子供と策定した。

平成25年度から文部科学省の人権教育研究推進事業人権教育研究指定校の指定を受け、中学校区の目指す子供像の具体化に取り組んだ。

まず、0歳から15歳の発達段階において人権教育を通して育てたい資質・能力を、

「人権教育の指導方法等の在り方について（第三次とりまとめ）」が示す「知識的側面」「価値的・態度的側面」「技能的側面」により整理した。

そして、中学校区の子供たちの実態から、様々な人権課題について話し合い、これまでのカリキュラム内容を見直し、「0歳から15歳までの人権教育カリキュラム」を作成し、作成したカリキュラムをもとに実践を行った。

「0歳から15歳までの人権教育カリキュラム」

城南中学校区 めざす子ども像「仲間とつながる 地域とつながる 夢・生き方につなぐ」

		保・幼	1・2年	3・4年	5・6年	1年	2年	3年
すべての人権教育を通じて育てたい子どもの姿		自分も友だちも大切に	自分も友だちも大切に	違いを認め合い、気持ちをきちんと伝える。	それぞれの価値観を認め合い、生き方につなげる。	社会の不合理さに幅広くふれ、正しく知る。	自分のこととしてとらえ、身近なところから行動する。	自分自身の夢・生き方につなげる。
育てたい資質・能力	知識的側面	自他の願いや思いを知る。	自他の願いや思いを知る。	互いを尊重することの大切さについて知る。	人権や平等の大切さについて理解する。	固定観念や偏見・差別のしくみを知る。	人間の尊厳、多様性の尊重について理解する。	自分の生活や自分のことを客観的に見つめる。
	価値的・態度的側面	自分のことを好きになり、人との関わりを大切にする。	自分のことを好きになり、人との関わりを大切にする。	互いを尊重し、人との関わりを大切にする。	自分たちの生活や自分のことをふり返り、自分が人とうまく関わろうとするかを考える。	自分自身と身の回りをふり返り、偏見・差別を許さず、なくそうとする。	自分たちの活動や生活を客観的に見つめ、自分と関連づけて返すことができる。	将来の生き方に展望をもつ。
	技能的側面	自分自身の気持ちを話す。	自分自身の気持ちを文に表したり話したりする。	人の気持ちを受け止め、自分の感じたことを自分の言葉で伝えようとする。	出会いの中で学んだことを活かして、人の思いに共感し自分の思いを伝える。	身近な生活の中にある思い込みや決めつけに気づき、問題を解決する力をつける。	社会の不合理さを見抜き、それなくすために行動する力をつける。	偏見・差別のあやまりを指摘し、それをなくすために行動する力をつける。
同和問題学習		いろいろな人と出会う中でふれあい、人と関わる心地よさを感じる。	身近な人との出会いから、学校・地域・家庭などたくさんの人に見守られていることに気づく。	人々の願いに共感し、自分の生活との関わりについて考える。	人権や平等の大切さについて理解し、自らの生き方につなげて自分ができることを考える。	偏見・差別について認識を深め、自分自身の生き方につなげ、将来の展望をもつ、偏見・差別をなくすために行動できる。		
障がい者理解教育		いろいろな友だちがいることを理解し、自分も友だちも大切に	いろいろな友だちがいることを理解し、自分も友だちも大切に	自他の違いや互いの思いを認め合う。	障がいについて理解を深め、障がい者とその周りの人の思いに共感する。	障がい者とその周りの人の思いや願いにふれ、違いを認め合う。	障がい者とその周りの人の思いや願いに共感し、すべての人が暮らしやすい社会を築くために自分ができることを考え、違いを認め合う。	障がい者とその周りの人の思いや願いを考え、自分自身につなげて行動に移す。
多文化共生教育		いろいろな国があり、いろいろな人、文化、生活があることを理解する。	さまざまな国や地域の文化(歌や遊び、食など)や言葉にふれ、文化、習慣、価値観の違いを理解する。	さまざまな国や地域の文化(歌や遊び、食など)や言葉を知り、出会いを通して文化、習慣、価値観の違いを認め合う。	つながりの深い国について知り、ともに生きていく社会を考える。	世界について幅広く知り、ともに生きていく社会を考える。	国際社会の中で違いを豊かさに、という認識をもち、ともに生きていく社会を考える。	ともに生きていく社会を考えることから、自分自身につなげて行動に移す。
平和教育		絵本やパネルを通して、戦争の恐ろしさを感じ、平和の大切さに気づく。	絵本やパネルを通して、戦争の恐ろしさを感じ、平和の大切さに気づく。	戦争について知り、命や平和の意味を考える。	平和の大切さを理解し、平和な社会を築くために自分ができることについて考える。			
男女共生教育		遊びや生活の場面を通して、友だちの思いに気づく。	自分と友だちの違いに気づき、自分の思いや友だちの思いも大切に	心と体の発達には、個人差があることを知り、ともに力を合わせる。	多様な性のあり方を知り、自分らしく生きることの大切さを考える。	自分自身をふり返り、性格や興味関心、得意不得意など見つめ、他者理解につなげ、ともに生きていく社会を考える。	性別の違いによる偏見に気づき、互いが通じやすい社会を築くために自分ができることを考える。	性の違いを認めるとともに、互いを尊重でき、社会を築くために自分自身につなげて行動に移す。

そのうち、以下に4年生の実践を紹介する。

◆4年生の取組 「ともに生きるために」

○単元のねらい 「0歳から15歳までの人権教育カリキュラム」 3・4年

すべての人権教育を通じて育てたい子供の姿		違いを認め合い、気持ちをきちんと伝える。
資質・能力	知識的側面	互いを尊重することの大切さについて知る。
	価値的・態度的側面	互いを尊重し、人との関わりを大切にする。
	技能的側面	人の気持ちを受け止め、自分の感じたことを自分の言葉で伝えようとする。

- ・ 社会にいるすべての人がともに生きるために、どんな工夫がされているのかわかる。
- ・ 出会いや体験を通して、互いを尊重する気持ちをもつ。
- ・ だれもが自分らしく生きられる社会の実現のために、他者との違いを認め合い、自分のことにつなげて考え、言葉で伝える。

## ○実践

[つかむ]

- ・アイマスクを使った疑似体験。(日常生活・点字をうつ等)
- ・教材を使って障害のある人の気持ちを考え話し合った。
- ・障害のある当事者Aさんとの出会い。  
体験した事、話し合った事を含めて、Aさんに手紙を書いた。  
Aさんと授業時間や給食、そうじの時間等を共に過ごした。

[ふかめる]

- ・Aさんと過ごした時間をふり返り、話し合いをする中で、自分にできることを考え、交流を行った。
- ・Aさんからの聞き取り。
- ・聞き取りを終えてのふり返りと話し合いを行った。
- ・Aさんに課題を提示してもらい、その課題の解決方法を考えた。

[ふり返る]

- ・課題解決の方法をグループで交流した。
- ・地域の福祉施設に赴き、自分たちが考えた課題解決の方法を発表した。

## 4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

子供の理解や指導の在り方については、教職員の意識が大きな課題となる。校種間連携の歴史が長い本校区であるが、職員の入れ替わり、経験の違いなどにより新たな課題が生じた。引き継がれてきたものを実践継承することが優先となり、何のために取り組むのか、どう取り組むべきかが校区全体で共有できていないのではないかと。そのために、全員参加で子供の実態を共有し、どんな子供に育てたいのかを論議し、連携担当を中心に、外部から講師を招へいし助言を頂きながら見直し、教育の計画や取組を再構築した。

また、授業の中で子供の姿、課題を共有するために、全員参加の校区研究授業及び研修会を年間3回持ったことも意識の向上につながった。

本校区では小中学校のみならず、保育所、幼稚園も含め連携をとり、同じ目指す子供像の実現に向けて取組を進めており、実態交流、課題の共有化を図るための会議や研修、保幼小、小小、小中の段差を少なくするよう、交流授業、行事参加、学習スタイルの一致、予定表の共通化、教職員の小中の授業乗り入れ等を行っているが、それぞれの施設のカリキュラムや行事、会議もあり、多くの共通の行事や会議、研修を持つことは難しいが、中学校区の行事や研究授業等は次年度の計画を立てる際に、各校で調整を行うことで解決を図っている。

## 5. 実践事例の実績、実施による効果

○中学校区で年間3回の公開授業研究、年2～3回の全体研修を積み重ねてきた結果、小中の全教職員が互いの違いや共通点を知り、授業づくりの観点の統一や中学校区の授業スタイル「個人—集団—個人」の定着が図られてきている。また、すべての授業の中で、集団づくりを意識することや支援の在り方などについて論議することから、人権教育を基盤とした授業づくり、集団づくりの方向性が明らか

かになってきた。

- 保護者や地域にも「にじわ学園」の取組が浸透してきており、保育所、幼稚園、小中学校が一緒に活動し、交流が進み、協働の取組が理解されてきている。
  - ・マスコットキャラクター「にじわん」：地域のフェスタで投票形式で決定された中学生発案のキャラクターで、保護者が手作りのぬいぐるみを作成する等、地域、保護者にも浸透してきている。
  - ・にじわの歌：地域の方たちが作詞作曲して出来上がった曲で、中学校区内すべての子供たちにその趣旨と共に広がり、保幼小中すべての子供たちが歌うことができるまでになっている。

## 6. 実践事例についての評価

### 《学校自己診断の結果から》

学校運営を多面的に見直すために全校児童、保護者対象にアンケートを実施している。どの学年も学校生活に対する満足度は高く、様々な取組の成果として表れていると言える。1項目を除きすべて80%以上、その多くは90%以上と非常に高い結果を得ている。

子供は学校生活が楽しいと感じている。	95%
クラスが居心地よく、楽しいと感じている。	94%
先生は、子供が相談したときに話を聞いてくれる。	95%
先生は子供が努力したことを認めてくれる。	98%
子供は「授業がわかりやすく楽しい。」と言っている。	86%
先生は教え方を工夫している。	94%
子供は総合的な学習の時間（生活科）の授業に満足している	92%
学校では命の大切さ、社会のルールやマナーについて学ぶ機会がある。	95%
学校では、お互いの人権を大切にすることを学ぶ機会がある。	97%
学校では、自分の生き方や将来について学ぶ機会がある。	86%

### 《地域、保護者の声から》

- ・今、保育している子供たちが、このように大きくなっていくのだと、今後このように育ってほしいと思う姿を知れる良い機会になりました。
- ・子供たちが出会いを通して一生懸命まじのことや、自分に出来ることを考え、前をしっかりと向いて発表していることが嬉しかったです。またそれを一つひとつうなずいて温かく見守る保護者の姿も印象的でした。
- ・聞き取りした4組の方の中から自分がどれを選んだかという理由や聞き取りをした振り返りも各々の思いがしっかりと伝えられていました。
- ・高学年になって発表もしっかりしてきて驚きました。大型紙芝居では役になりきって長いセリフを話している姿に感動しました。
- ・地域の方が人権についていろんな形で子供たちに伝えてくださり、子供たちはしっかりと受け止めて学んだことを発表できていました。自信を勇気を優しさを持ってこれから子供たちがどう行動し、どう成長していくのか、とても楽しみです。

- ・高学年らしく堂々としてしっかり発表できていて頼もしく思いました。今回の学習を通して、あらためて生きていくことの重さや大切さを考えてくれたら嬉しいです。

これまでの深い連携と積み上げによって、子供たちは確実に成長していることを保護者、地域の方々と実感している。取り組む内容はその時々の子供たちの実態や課題によって少しずつ変化していくが、題材だけが残し、それを指導しきることに重点が置かれるのではなく、そのときの子供、クラス、学年の実態に応じて、「にじわ学園」の目指す子供像に向かって、「子供の見方」「つきたい力」「学びのスタイル」が継承されるよう、今後も丁寧な連携を続けていこうと考えている。

## 【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

### 高槻市立若松小学校

中学校区（1中学校、2小学校、1保育所、1幼稚園による「にじわ学園」と呼称）として地域学校種間の接続や一貫性を重視し、学園として目指す子供像にも、「自分を大切に、人を大切にする人権感覚の向上を目指しています。」（HP）と明示されている。また、「0歳から15歳までの人権教育カリキュラム」として各学校段階的で継続的に発展するプログラムを策定し、小学校中学年では、アイマスクによる疑似体験学習、障害のある人の気持ちを話し合う学習、障害のある方との出会いや聞き取り、福祉施設での学習活動などが組み込まれている。学校と地域社会を結ぶ継続的で発展的な人権教育を検討する際に参考となる事例である。